

# 地域を映す水文化・ 水が導く地域の未来

水文化の保存再生を通じた水源地域の活性化方策



平成12年3月

国土庁長官官房水資源部

水文化とは、

人々が、水を上手に活用し、また水を制する中で、長い時間をかけ、生み出されてきた有形、無形の文化や伝統です。各地域はそれぞれ、個性的な水文化を持っています。



水文化には、

祭事や信仰、伝統工芸、水車や堰等の施設などがあげられますが、それに加え、水を中心とした生活パターンや生活様式も水文化ととらえます。子どもの水遊びも、立派な水文化です。



水文化は、

地域固有の自然環境や社会条件の中で、磨き上げられたものです。そのため、水文化は、その地域の姿を映し出す鏡となります。また「生活の知恵」を内に秘めたものでもあります。



本指針は、

各地域が、このような水文化の持つ高い価値に気づき、水文化を保存再生していくための手助けとなるものです。保存再生活動は、地域に健全な水循環と、真の活力を甦らせませす。

# 概要

## 1. 本指針の目的と位置づけ

本指針は、水文化の持つ高い価値に改めて着目し、地域が主体的に水文化を保存再生することを通じて、地域における健全な水循環を再構築し、地域の活性化を図るための参考になるものである。

## 2. 水文化の捉え方と定義

「地域の人々が水を上手に活用し、また水を制する中で生み出されてきた有形、無形の文化や伝統」。具体的には、祭事等の行事・イベント、水車や堰等の伝統施設や工法、伝統工芸等、水を中心として形成された特徴的な生活スタイル・生活様式など。

## 3. 策定作業の狙い

本指針で示したように、水や水文化の現状を把握し、保存再生活動を展開することは、地域を知り、新たな成長を描き出すことであり、地域を活性化する作業そのものである。

## 4. 策定の作業

### (1) 地域の“水”を知る

まず、雨の量、大きな循環（自然の循環）、小さな循環（人為的な循環）を把握する。次に、地域の水資源を洗い出す。これらをもとに「地域の水循環図」を作成する。そして、水を通して地域固有の風土を見直していく。

### (2) 地域の“水文化”を知る

「水資源と水文化台帳（水文化アーカイブ）」を作成し、水文化を洗い出す。次に、「水の歳時記」等を作成し、地域における水文化の位置づけを整理する。さらに、「水と水文化年表」を作成し、水文化の形成・衰退の歴史を整理する。加えて、「水文化の衰退要因図」を作成し、水文化の衰退要因を考える。このように、水文化を理解することを通じて、地域の特徴や歴史・変遷を見直していく。

### (3) 地域の保存再生活動を知る

地域で展開されている保存再生活動は、地域発展のポテンシャル、大切な素材と考えられ

る。そこで、「水文化保存再生活動団体台帳」を作成することで、地域内で展開されている保存再生活動を網羅的に把握する。

### (4) 地域の“水と水文化MAP”を作る

これまでの台帳や歳時記・年表の作成によって収集・整理された地域の水と水文化に関する基礎的データを、地図に落とし込み「水と水文化MAP」を作成する。水文化は、地域の姿を映す鏡ともいえるものであり、地図を作成することで、これまで見えなかった地域の姿やポテンシャルを発見できる。

### (5) 保存再生活動方針を決める

地域は、水文化衰退とともに何を失ったのかを整理した上で、活動ゴールや、活動方針を決め、「活動方針書」を作成する。これに基づき、地域独自の保存再生活動を展開することで、水文化の持つ大いなる価値を引き出し、水文化を活用した地域活性化を図っていく。

## 5. 結び

### 水文化の価値

水文化の保存再生活動を通じて、人々はあらためて水や水文化と触れ、地域の位置づけを再確認する。そして、地域社会の固有のリズムを取り戻し、固有の智慧を知る。水文化と直面することは、まさに自分（地域）自身と向き合うことに他ならない。

### 保存再生活動は内発的成長を誘発する

これまでは「外発的成長」、つまり、地域の発展の原資は、外部から与えられると考えられてきた。しかし、地域自身を再確認する契機を与えてくれる水文化の保存再生活動は、自分の身の丈にあった発展を志向する「内発的成長」を誘発するものである。

### 新たな水文化の創造に向けて

水や地域等の劇変によって水文化は衰退した。こうした中で、伝統的な水文化をそのまま保存再生しても、定着させることは難しい。水文化の意味を噛みしめながら、変貌を遂げた地域と水を土台として、新しい水文化を創造していく時期であろう。

# 水文化の保存再生を通じた水源地域の活性化方策（指針）

## 目 次

	頁
1．本指針の目的と位置づけ .....	1
(1)本指針の目的 .....	1
(2)本指針の位置づけ .....	1
2．水文化の捉え方と定義 .....	2
3．策定作業の進め方と狙い .....	5
(1)策定作業の進め方 .....	5
(2)策定作業の狙い .....	6
(3)「成果物」の役割 .....	7
4．策定の作業 .....	8
(1)地域の“水”を知る .....	8
(2)地域の“水文化”を知る .....	10
水文化を洗い出す .....	10
地域における水文化の位置づけを整理する .....	14
水文化の形成・衰退の歴史を整理する .....	16
水文化の衰退要因を考える .....	18
(3)地域の保存再生活動を知る .....	20
(4)地域の“水と水文化MAP”を作る .....	23
(5)保存再生活動の方針を決める .....	28
5．結 び .....	32

# 1

## 本指針の目的と位置づけ

### (1) 本指針の目的

全国各地域に伝わる水文化の持つ高い価値に改めて着目し、  
地域が主体的に水文化を保存再生することによって、  
地域における健全な水循環を再構築するとともに、  
地域の活性化を図ること、を目的とします。

### (2) 本指針の位置づけ

#### 活動展開の方向性を提示

本指針は、水源地域等が、「水文化の保存再生を通じた地域活性化方策（以下、活性化方策）」を検討し、立案する際の手引きとなるものです。そして、それぞれの地域が、本指針を参考にしながら、計画書を作っていくことのできるように本指針を構成しました。

しかし、水文化が地域固有のものであるのと同様に、水文化の保存再生活動や地域活性化方策も、それぞれの地域が独自に行うべきものです。各地域で展開される活動には、標準（スタンダード）はありません。

本指針は、水文化の洗い出し方や、保存再生活動の進め方、また、それを地域活性化に結びつける際の考え方などについて、作業の進め方を提示した上で、典型的な例示や先進事例を紹介しています。あとは、それぞれの地域が、地域の中で作業を進め、計画書等を作成していくこととなります。このように、本指針は一つの方向性を示したにすぎません。

#### 行政が調整推進となり地域全員参加で進める

各地域に伝わる水文化は、古来からの地域と水とのかかわりの中で醸成されたものです。保存再生活動を展開する際には、水文化形成の背景となる水とのかかわり、つまり、生活・産業・祭事等の幅広い分野にわたる水とのかかわり、を理解することが重要です。

そのため、活性化方策の策定作業は、行政のみならず、住民や企業、団体等を取り込んで地域社会の構成員が全員参加で進めることが望ましいといえます。そして、この中で調整推進役となるのが地方自治体です。

こうしたことから、本指針は、調整推進役の地方自治体の作業を側面支援する内容になっています。





## 水文化の捉え方と定義

活性化方策を作成するにあたっては、まず”水文化”を定義する必要があります。そこで、水文化の一般的な捉え方や、わが国全体の水文化の状況等を整理した上で、”水文化”の定義を試みました。

### ■水文化の形成

わが国では、それぞれの地域が、水と深いかかわりを持っています。

古来から、川や湖は、地域の境界であり、人・物資・情報の行き交う路でもありました。また、粉ひき水車、川漁、木材流送など、水は生産活動とも密接なかかわりを持っていました。また、用水路から水を引き込んだ洗い場は、生活の中心となっていたといいます。このように水は地域に恵みを与える存在である一方、洪水や濁水等の災いをもたらす存在でもありました。各地の龍神様や水神様を祀るほこらや祭り、民話や伝承がそれを今に伝えています。

各地域が持つ水とのかかわりは、長い歳月の中で、

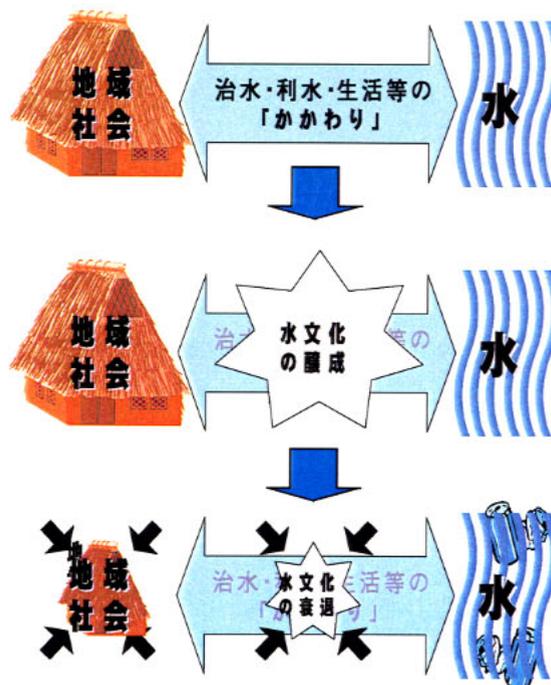
「水文化」を醸成していきました。地域と水とのかかわりが地域独自のものであることから、「水文化」は唯一無二の個性を持ったものです。これが「水文明」ではなく、「水文化」といわれるゆえんです。

### ■水文化の衰退

ところが戦後、急激な経済成長の陰で、都市部を除く多くの地域では過疎化や高齢化が進み、地域の姿が大きく変貌してしまいました。水そのものも流量が減り、汚れが目立つようになりました。さらに、河川の洪水対策を最優先にして整備が進められたことで、水と触れあう場や機会は減り、農業・林業・漁業など水と深く関係した産業が衰退するなど地域と水とのかかわりも大きく変化していきました。

今、全国各地の個性豊かな「水文化」は、その存立基盤を失い、衰退の方向に向かっているようです。「水文化」の衰退は、地域に、そして私たちにどのような影響を与えるのでしょうか。

図1 水文化の形成と衰退



### 水文化の持つ意味

「水文化」は、その地域が持つ自然環境や社会条件を端的に映し出す「鏡」となります。また、長い年月の中で磨き抜かれた「生活の知恵」を内蔵しているものです。

地域自身を映し出す鏡を失い、地域固有の生活の知恵を忘れてしまった地域とは、個性の乏しい魅力に欠ける地域といえないでしょうか。

しかし、日常的に「水文化」に触れ、「水文化」と対話することができれば、本来の自分達（地域社会）の姿や、忘れかけていた生活の知恵を再確認することができます。

「水文化」の保存・再生とは、このように地域の人々が、日常的に「水文化」に触れる機会を生み、自ら考える契機を作り出すことが第一の狙いとなります。

### 健全な水循環系の再構築と新しい水文化の創造

今、わたしたちが触れることのできるほとんどの「水文化」は、古来からの地域と水とのかかわりの中から生まれてきたものです。しかし、昔と今では、地域の姿や水の様子が大きく変貌し、これに伴って地域と水とのかかわりも大きく変化しています。こうした中で、昔ながらの「水文化」が、現代社会にそぐわなくなりつつあることも否めません。

「水文化」は、一朝一夕に形成されるものではありませんが、今後、現代を生きるわたしたちの使命として、新しい「水文化」を形成していくことも重要です。

今後、わたしたちは、これからますます必要となる水道の整備や、農業用水路の整備、河川の整備などに際しても、新しい「水文化」の形成、という視点を忘れずに、地域にあるべき「水」を考え、また

「水とのかかわり」を大切に育てていくことが、新しい「水文化」の形成に、大いに役立つといえるでしょう。

### 水文化の定義

本指針では、こうした考え方のもと、水文化を以下のように定義しました。

#### 本指針での水文化の定義

水文化とは、「地域の人々が水を上手に活用し、また水を制する中で生み出されてきた有形、無形の文化や伝統」です。水にかかわる祭事・信仰、水車や堰などの伝統施設や工法、水を活用した伝統工芸などに加え、水を中心として形成された特徴的な生活スタイル・生活様式なども「水文化」ととらえることとします。



## 2 水文化の捉え方と定義

### コラム 水文化と水文明

水文化は、地域の人にとってあまりにもあたり前の事象であり、説明することはできません。地域固有のもので、文化とは、「民族として覚えている」こと、「肌で感じている」ことであり、他の地域に応用できない、といえましょう。

一方、マニュアル化できるものは「文明」といわれます。四大文明以降、上下水道やさまざまな都市基盤整備など、一律に整備しなければならないことが増し、誰にでもわかる方法・手法が必要となってきました。これが「文明的手法」です。ノウハウさえ身につけてしまえば、誰がどこで行っても、きちんと使いこなせてしまって、その地域の条件などはあまり関係ないのです。

しかし、「文化」は一律ではありません。日本の河川は「滝」と呼ばれるほど水勾配が急で、河川の形態や水循環のありかたは他国とは全く違います。こうした中で生まれた伝統的な日本の治山・治水技術はヨーロッパのそれと大きく異なります。これが日本の水文化ではないかと思えます。そして、時には犠牲者を出しながら水とのつきあい方を模索していく過程において、智慧を働かせ、地域がそれぞれ賢くやってきた……水文化には、地域固有の智慧も隠されています。

従来の文明で構築された世界標準の川づくりも、見直しが必要なのかもしれません。

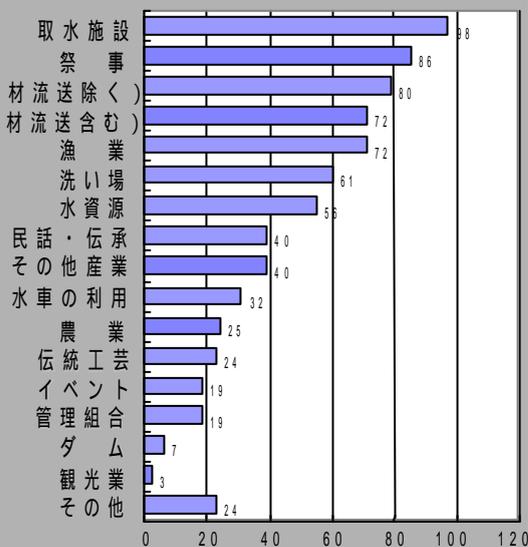
(水文化検討委員会 江戸川大学教授 恵 小百合氏)

### コラム 水文化ってなんだろう？

1999年11月に、国土庁水資源部は、「水文化」に関する調査を行いました。そして、全国2千以上の水源地域の自治体の方々に水文化に関するアンケート調査をお願いし、600を超えるご回答をいただきました。数が多い順に、上から、取水施設、祭事・・・と並べていますが、ざっとみても、かなりのたくさん種類の水文化があります。

回答が最も多かった取水施設は、用水路や堰、ため池などです。施設そのものを水文化、と回答した例が一番多いことから、これらが身近なものとして、生活にとけこんでいる様子が伺えます。ちなみに、2番目の祭事には、雨乞いや五穀豊穡、大漁祈願などがあげられています。

ただし、こうした水文化は、いわゆる伝統的な、地域の代表選手といえます。この他にも、例えば子どもたちの「水遊び」や、戦前はごく当たり前だった「川での洗濯」等の「無名の水文化」が、今も日本各地に無数に眠っています。





## 策定作業の進め方と狙い

### (1) 策定作業の進め方

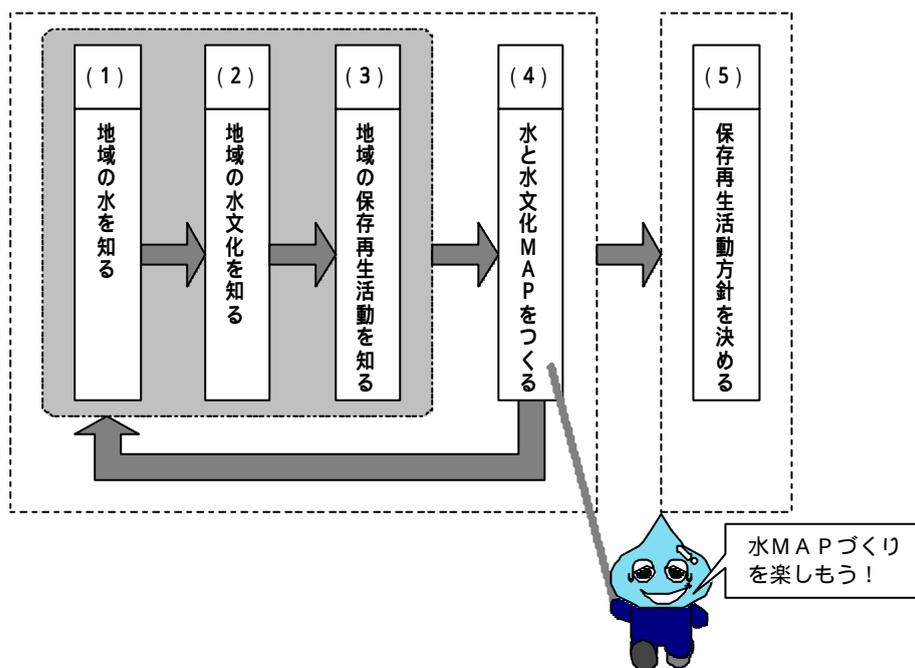
活性化方策の策定は、以下に示す5つのステップで作業を進めていきます。

(1)~(3)までが、地域の現状把握です。地域の「水文化」とともに、水文化の基盤ともいえる地域の「水」や、水文化の「保存再生活動」についてもあわせて、地域の水文化をめぐる実態を把握していきます。

そして、(4)では、(1)~(3)で得られたさまざまな情報を整理して、水文化をわかりやすく伝える「水と水文化MAP」を作ります。

さらに、(5)では、再生保存活動の方針を決め、作業方針書を作成します。そして、これに基づいて、地域ぐるみで保存再生活動に取り組んでいきます。

図2 策定作業の進め方



### コラム たのしく作業を進めるために・・・

「指針をみながら楽しくやってみよう」という動機づけにつながればよいと思っています。例えば、水と水文化マップづくりでも、作業を楽しく進められる仕組みが必要だと思います。子どもたちに描いてもらったり、昔遊んでいたお年寄り、つまり「オールド水ガキ」に描いてもらうなどのアイデアが考えられます。また、全ての作業に取り組むのは難しいので、できることから始めることがポイント。まず、現状把握のデータベース化を楽しく行う方法を検討してみたいかがでしょうか。

(水文化検討委員会 宮城大学 アン・マクドナル氏)

(2) 策定作業の狙い

2段階の地域活性化

一連の作業には、2つの段階があります。

一つは、現状を把握してMAPを作る段階です。水や水文化等の現状を見直すことは、地域の素晴らしさを「発見」することにつながります。そして、作り上げた地図を持って現地を「確認」することで、また新たな「発見」がある…。第1段階は、「発見」

「確認」「再発見」という作業をローリングさせて、地域への理解を深めていく段階です。

次は、水や水文化の保存再生活動を展開する段階です。第1段階での地域への理解をもとに、地域を変えるアクションを実際に起こしていきます。

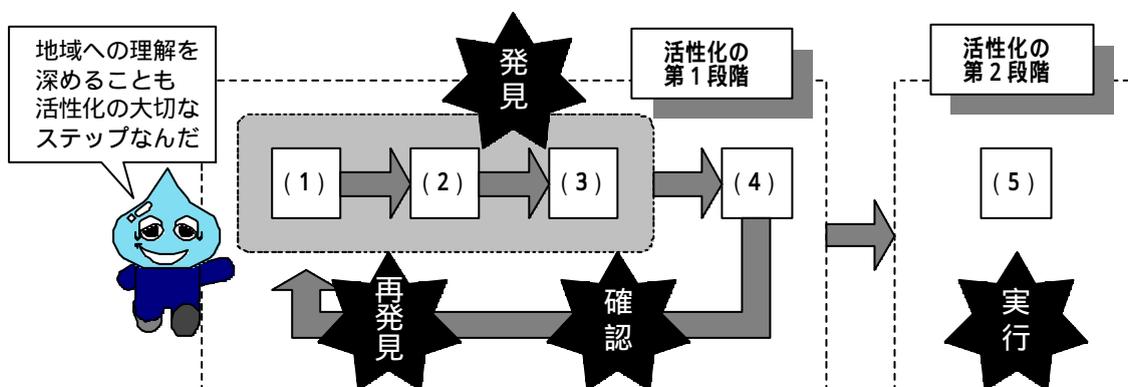
このように、水や水文化の現状を把握し、保存再生活動を展開することは、地域を知り、地域を変えていくことに他なりません。また、地域の構成員全員で活動に取り組むことで、地域への理解は、より一層深まっていきます。つまり、一連の作業は、水文化本体の保存再生という目的の他に、地域を活性化する方法でもあるといえるでしょう。

保存再生活動は「内発的成長」を誘発

このように、水文化の保存再生活動は、地域社会を再確認する契機を与えてくれます。そこで、改めて地域を見直すことで、地域社会の本来の個性やポテンシャルを再発見することができるでしょう。そして、それらが地域社会の次なる発展をもたらす大切な資源であることが確認できるはずです。

これまで、地域社会の発展の原資は、外部から与えられるもの、導入するものと考えられてきたきらいがあります。戦後、全国各地で展開されてきた開発誘導的な地域開発には、そうした傾向が強く見られました。これを「外発的成長」といいます。一方、自分（地域社会）がすでに持ち合わせている発展の原資をもとに、自分を見失わず、自分の身の丈にあった発展を志向することを「内発的成長」といいます。水文化の保存再生活動は、まさに、「内発的成長」を誘発するものです。

図3 成果物の目的と作成手順



(3) 「成果物」の役割

8つの成果物

本指針では、策定作業を効率よく、継続的に進めていくために、また、行政のみならず地域の構成員全員が一連の作業に参加しやすいように、作業の各段階で8つの「成果物」を作成することとしました。

実際の作業は、この「成果物」を作成することで、進められるようになっていきます。

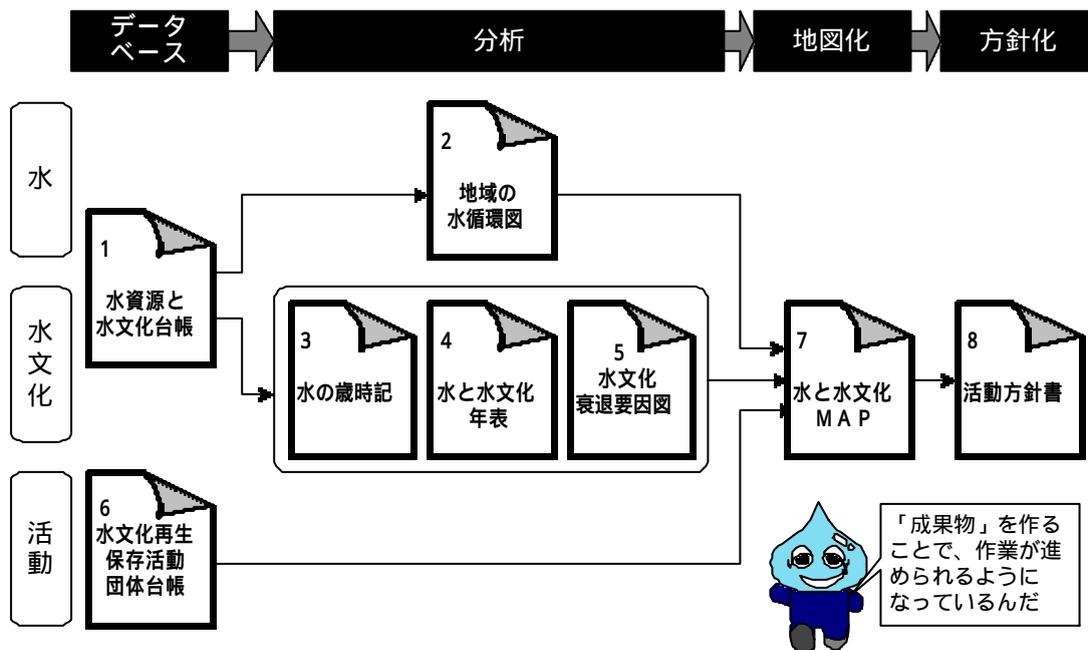
成果物は、大きく「データベース」、「分析」、「地図化」、「方針化」に分類できます。まず、さまざまな情報を蓄積するための2つの「データベース」を作成します。そして、データベースをもとに、水や水文化、地域等の理解を深める「分析」を行うための4つの資料を作成します。さらに、収集した情報や分析成果を一元化し、土地と関連づけを行う「地図」(「水と水文化MAP」)を作成します。最後に、地域全体の保存再生活動の方針を示す「方針書」を作成します。

地域の実状にあわせて成果物を作成

「(2)策定作業の狙い」で述べたように、成果物を作る過程で地域を再認識することが、地域を活性化することにつながっていきます。こうしたことから、成果物を作ること自体に目的があるのではなく、成果物を作る過程こそが重要といえるでしょう。

そのため、これらの成果物は、各地域が、できる範囲で、また、できるところから始めていけばよいのです。

図4 作業段階と成果物



# 4



## 策定の作業

### (1) 地域の“水”を知る

地球上の水には限りがあり、海水 水蒸気(雲) 雨 川と大きく循環しています。雨として陸地にもたらされた水は、川や湖に流れ込んで表流水となり、残りは地中に浸透して地下水になります。そして、地下水は湧水や井戸水として再び地上にわき出します。

まず、それぞれの地域に水がどのようにもたらされ、循環しているのか、を知ることから始めます。これらは、水文化形成の基盤となるものです。こうして、水を通して地域の固有の風土を見直してみます。

#### 雨の量を知る

当該地域の降雨量を調べます。まず、地域の平均降雨量を全国平均と比較する等により、水が多い地域か、少ない地域かを判断します。次に、地域内の各地区ごとの降水量を調べます。地域の中でも降雨量には大きな差があることがかります。

#### 大きな循環(自然の循環)を知る

「大きな循環」とは、海水 水蒸気(雲) 雨 川という流域圏全体での自然本来の水循環です。水がどこから来て、どこに流れるのか、を把握します。この際、河川等の表流水だけでなく、地下水についても把握します。地下水には、比較的浅い所を流れる自由地下水と、深い所を流れる被圧地下水とがあり、また、流れが目に見えないことなどから、詳細な調査を要します。地下水は、まず、わかる範囲で把握することとします。

次に、この「大きな循環」の中で当該地域が、どの位置に属するかを把握します。水を介して他地域とのつながりをみていきます。

#### 小さな循環(人為的な循環)を知る

「小さな循環」とは、上・下水道や農業用水路などのように、人為的に作り出された水循環のことをいいます。「小さな循環」は、「大きな循環」の支枝として位置づけられます。「大きな循環」のどこから取水し、どこへ返しているのかを把握します。

#### 地域の水資源の洗い出し

当該地域内の水資源を把握します。水資源とは、ため池やダム、堰、用水路、湧水、井戸などをいいます。なお、これらの施設は、行政内部での管理部門が異なり、現状一元的に把握することが難しいことや、湧水や井戸については、私有地にありその数も多いことから、改めて洗い出し作業が必要となります。そこで、「水と水文化台帳(水文化アーカイブ)」を作成することとしました。「水と水文化台帳」の作り方は、図6を参照して下さい。

#### 「地域の水循環図」を作成する

～ の成果を「地域の水循環図」に整理します。



水を知ること  
で地域の  
固有の風土  
を見直そう

「地域の水循環図」の作り方

- ① 「水循環図」は当該市町村に存在す表流水や地下水、湧水等の水が、どの範囲で循環しているかを把握するために作成します。まず、地域及び周辺地域の降水量、大きな水循環、小さな水循環、水資源等を把握します。
- ② 収集した情報をもとに、水循環の概念図を作成します。正確さを追求するのではなく、水の循環が誰でも感覚的に捉えられるようにわかりやすさを追求することが重要です。（一般的に、水循環の概念図は断面図を用いることが一般的です。しかし、それでは流域圏における当該地域の位置づけを示すことが出来ません。そこで、図5では流域圏全体を立体的に示しています。しかしこれも一例であり水の循環を示すことができれば、どのような表現方法でも問題ありません。）

図5 地域の水循環図の例

